

研究ノート

在日百年のファミリー・ライフストーリー 河家の場合【第四部 ソヘグム奏者の道】

猿 橋 順 子*

1. はじめに

1925 年に朝鮮半島全羅道光州から渡日し、世田谷で生活の基盤を築きあげた河永俊（ハ・ヨンジュン）さん（1889～1961）を起点に、河家の在日百年の家族の来し方について、ファミリー・ライフストーリーという手法上の提案をしながら編んでいる。本稿はその第四部である。第一部では、河永俊さんと妻の金松亭（キム・ソンジョン）さん（1896～1985）の渡日と、世田谷での暮らし、焼肉店「千里」の創業（1959 年）までを記述した。続く第二部では、「二世から三世へ」と題し、永俊さんの長男の在日コリアン二世、河應烈（ハ・ウンリョル）さん（1929～2003）と妻で在日コリアン一世の崔順子（チェ・スンジャ）さん（1930～2013）の代から、その息子の河孝成（ハ・ヒョソン）さん（1949～）と妻の崔英愛（チェ・ヨンエ）さん（1954～）へと家業が受け継がれていく経緯を記した。第三部は「末子さんの少女時代」と題し、永俊さんの次女、河末子（ハ・マルチャ）さん（1936～）へのインタビューに基づき、1940 年代の激動の時代について、当時、少女だった末子さんの目線から記述し、従前の記録との相違について考察を加えた。

現在、焼肉「千里」は在日コリアン四世の河明樹（ハ・ミョンス）さん（1977～）が、三代目オーナーシェフとして母の英愛さんと共に営業している。2025 年現在、40 代後半の明樹さんは、家庭ではもちろんのこと、同胞コミュニティの中でも、地域コミュニティの中でも中心的な存在になりつつある。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

そこには経営者や地域市民として若手から中堅へと成熟しつつあることに加え、民族文化に触れる機会を通して培われた人格形成、音楽活動を通して広がっていく、社会的・文化的ネットワークの蓄積という側面が認められる。明樹さんは8歳の時に、朝鮮学校で民族楽器のソヘグムを手にしてから現在に至るまでの40年間、現役のソヘグム奏者として演奏活動を継続させ、現在では後進の育成、音楽会はもとより文化継承活動や文化交流イベントの企画、運営にも広く携わっている。

その道のりを妻の尹慧瓊（ユン・ヘギョン）さん（1975～）と共に歩んでいる。二人は人生の伴侶でもあるが、日本においてソヘグムの音楽世界を守り育んでいくという志においては、同志であり、仲間でもある。本稿では、明樹さんと慧瓊さんのソヘグム奏者としての人生の前半部、年代にすると1980年代半ばからのおよそ20年間について記述していく。

2. 明樹さんの誕生と朝鮮学校入学

河明樹さんは、河孝成さんと崔英愛さんの長男として、1977年に生まれた。夫婦が第一子の名前を父につけてもらおうと應烈さんをお願いしたところ「私はいいいから、お前（孝成さん）がつけなさい」と言われた。分かりやすくていい名前。元気に育って欲しい。そういう願いを込めて、「明るい樹」の明樹（ミョンス）、翌年に生まれた長女は「明るい実」の明実（ミョンシル）と名づけた。

孫の名づけを遠慮した應烈さんだったが、明樹さんと明実さんが産まれたことで、自宅兼店舗の改築を実行した。明樹さんが3歳か4歳の頃だったというから、1980年頃ということになるだろう。

明樹さんは、今はない東京第八朝鮮初級学校に1983年に入学。玉電の廃業（1969年）に伴い¹⁾、東急バスが運行するようになっていた。家の目の前にバス停があり、便利で通いやすかった。同級生は12人。在日コリアン四世の明樹さんにとって、人前で朝鮮語を話す初めての経験も、民族楽器のソヘグムに

1) 三瓶嶺良 (n.d.) 「玉電の歴史～開通から玉川線廃止まで～」 (<https://setagaya-line.com/>)。

出会ったのも、この朝鮮学校だった。

明樹さん：入学式の日に一年生が挨拶をするんですね。それは朝鮮語でしかないといけない。それで入学前に先生が家を訪ねてきて、意味は分からないんですけど朝鮮語を教えてくださいました。挨拶の言葉です。具体的に何を言ったのか、記憶にないですが、その時、朝鮮語で挨拶をしたということが初めて正式に使う朝鮮語でした。

明樹さんが物心ついたとき、家庭の中はほとんど日本語で、家の中の朝鮮語といえば、料理名と、大人が好んで聞く韓国の音楽、トロットぐらいだったとふり返る。朝鮮学校は、小学校一年生から「無理やりにでも朝鮮語を使う」環境で、学校の中に入ったら「ある意味、日本ではないような雰囲気が漂う場所」と表現する。だから、新入生が嗜れやかな門出をくじかれないように、先生達は就学前に一軒一軒家庭を訪問して朝鮮語の手ほどきをして回るのである。

学校生活を支えるためには親の協力も不可欠である。明樹さんが朝鮮学校に通っていたときは、給食を出していた。保護者の中からひとりだけが専従として勤務し、毎日2人ずつがボランティアで調理に入る。献立は特に朝鮮風の料理ということもなく、子ども達が喜びそうなものだったそうだ。母親達が協力しながら調理し、先生達に感謝の気持ちを込めて盛り付けるので、当時の先生達はよく「体重が増えた」と言っていた。今になってふり返ると「栄養バランスやカロリーなどを配慮した献立にはなっていなかったですね」と英愛さんは反省もする。それより、「楽しく美味しくたくさん食べさせたい」という気持ちで給食を調理し、喜んでもらえていることにやりがいを感じていた。学校は母親達が集い、協力して学校を支える、社交と相互扶助の場でもあった。

3. 明樹さんのソヘグムとの出会い

明樹さんがソヘグムと出会ったのは、小学校三年生の時（1985年）だった。

明樹さん：小学校三年生の時の担任の先生が、その時期、ソヘグムの演奏家として注目を浴びていた方だったんです。金剛山歌劇団²⁾に入るだろうと思われていた人が音楽教師になって、初めて着任した学校で、着任して2年目に私のクラスの担任になりました。後に先生からお聞きしたのですが、「民族楽器の教師になって、子ども達に教えたい、継承させたい」と思って教師になったそうです。その時に先生が手に入れた楽器を、今、私がお借りして使っています。朝鮮に行ってもなかなかない楽器です。先生は、その楽器を手に入れるまで、十台ぐらい手に入れたと聞きました。お父様が朝鮮大学の先生で、平壤に行く機会があったそうで、その時に平壤の楽器職人に「ここをこう直して」、「こんな風に調整してみて」と伝える。そうやって改良を重ね、何台もの楽器を試して、最後に届いた楽器が、今、私が弾いているこの楽器です。その時期（1980年代）は、ちょうどソヘグムを全国的にいい楽器にしようとのぎを削っていた時期でしたから、もっとも腕のある楽器職人が手がけて作り上げた楽器なんです。

先生は明樹さんにソヘグムを弾くことの楽しさを教えてくれた。次の学年でも担任となったが、五年生になる年には別の学校へ異動となってしまった。先生は、着任する先々で学生達にコンクールで金賞を取らせ、指導者として有名になっていった。

先生が指導のかたわらで楽器職人と共に試行錯誤しながら改良を重ね、磨き上げたソヘグムは、平壤でも評判になるほどの名器となった。その楽器は、先生の教え子で、明樹さんの先輩にもあたる金剛山歌劇団のソヘグム奏者がしばらく使用していた。その奏者が一線を退くことになり、楽器を先生に返したと聞きつけた明樹さんは、すかさず先生に連絡を取った。率直に「あの楽器を私

2) 朝鮮民主主義人民共和国の国外にある唯一の総合芸術団体。拠点を東京都小平市におく。1955年6月に「在日朝鮮中央芸術団」として発足。1974年8月「金剛山歌劇団」に改名。

に貸してくれませんか」と申し出たのだという。すると先生は、すぐに快諾し、翌日には楽器を手渡すためにふたりは落ち合った。先生は「いずれは君に譲ろうと思っていたんだよ」と言ってくれたそうだ。その楽器が歩んできた道のりを知っている明樹さんは、身に余ることだと考えた。そこで、当初から自分が意図していたとおり、「譲り受けるということではなく、この楽器をしばらく私に貸して下さい」と改めて依頼し、先生は頷いてくれたのだという。

明樹さん：だから、これは私の楽器ではないんです。先生からお借りしている楽器です。

民族楽器、ソヘグムの魅力を子ども達に伝えたいという志をもって教師となり、はじめて着任した学校の教え子が40年間続け、こだわり抜いて改良した楽器を大切に演奏してくれている。教師として、音楽家として、冥利に尽きることだろう。明樹さんが平壤に持って行って演奏すると、現地の演奏家からも「あなたのその楽器はとてもいい音が出るね」と羨望のまなざしが注がれるそうだ。



朝鮮中級学校に進学した明樹さんは、ソヘグムで「上を目指したい」と思い、当時、池袋で開かれていたソヘグム教室に毎週通った。教室は、池袋の繁華街を通っていくため、英愛さんは内心「中学生がこんなところを通して大丈夫かな」と不安に思うこともあったのだとふり返る。中学三年に進級する年の春休みには、北区十条の東京朝鮮中高級学校の民族管弦楽部の練習に参加した。毎週日曜日、高校の部活に参加したのだそうだ。

明樹さん：（部員の皆さんに）かわいがってもらいました。入った瞬間に大歓迎。中学生が高校の練習に「参加させてください」って来るんだから。ソヘグムは朝鮮半島では男性の奏者が多いのですが、日本では女性に人気なんです。そこ（高校の部活）では男子学生が私ひとりだったので、特別待遇でした。高校生のヌナ（お姉さん）達がかわいがってくれて、お昼もご馳走してくれる。合奏のときは一番前で演奏させてくれました。いつも一番前で弾いていたら演奏技術は上がっていきます。

参加させてもらっていた高校の部活で、明樹さんと同じように民族楽器に没頭している中学生に出会った。専門はチャンセナプ³⁾というリード楽器で、楽器は違えども二人は瞬く間に意気投合をした。明樹さんは、中学三年の夏には彼が通う西東京朝鮮第一初中級学校の部活にも参加し、友情を育みながら楽しく切磋琢磨した。今でもよき理解者で、心許しあえる友であるという。

その十条にある高級学校に進学してからもソヘグム中心の生活であることに変わりはなかった。

明樹さん：学校に、朝早く行って夜遅くまで練習。日曜日でも学校に行って練習。十条に暮らすおばあちゃん（末子さん）⁴⁾の家に泊まりに行って弾

3) 朝鮮半島の伝統楽器のテピョンソを改良した管楽器。

4) 祖父の妹（1936年生まれ）。末子さんのライフストーリーについては、第三部を参照のこと。

いたりしました。幼い頃からそこのおじいちゃん（南鐘祐さん）も私のことをとてもかわいがってくれました。

楽器のメンテナンスでお世話になっている職人も長い付き合いだ。

明樹さん：楽器のメンテナンスは高校生の時から同じ人にお願いしています。

北池袋にある楽器の制作や修復、販売をしているところです。もう30年来の付き合いになります。この楽器のことを理解してくださっています。ソヘグムは私が若い頃は「壊れたバイオリンの音がする」と言われていたんです。民族楽器の中でも地位が低かった。楽器もいい音が出ないといけません。20代の頃は、週に2、3回行って、「この音」、「この音」とひとつひとつ調整してもらって、夜遅くまで居たこともありました。バイオリンは完成された楽器です。音色も、楽器の構造も、見た目も。ソヘグムはまだ確立される前の段階にある、道なかばの楽器です。2本弦から始まって4弦になりました。……1945年に朝鮮半島が日本の植民地支配から解放されて、1953年に南北に分断されて、やっと社会が安定してきた1960年代。社会主義が豊かで、中国やソビエトに力があって、これから国を発展させて豊かにしていこうという時代の中で、芸術に関してもいいものがたくさん生まれました。ソヘグムは、そういう時代に生まれた楽器です。チェロを作っている人、指揮者の人、作曲家、いろんな分野の音楽家たちが意見を出し合って、バイオリンの構造を取り入れたり、バイオリンの音楽的な感性や音色を追い求めたりしつつ、追い求めすぎるとバイオリンになってしまうので、もともとあった個性も大切にしながら、弦、弾き方、奏法、それぞれの面で追究して、人の心や魂に響く音を出そうと追究する。そういう過渡期にある楽器のメンテナンスなので、自分でもいじっちゃったりしています。弾き方といじり方で音色が変わる。だから、構造から何から、音が出る仕組みが分かっているとそこに携われないんです。必ず毎日弾きます。そ

れは自分にとっての練習という意味もありますが、楽器のコンディションを見るため。その時に弾く曲はバイオリンの練習曲ですけど、毎日弾きます。

最近では、後輩達が、かつて自分がそうだったように楽器店に足繁く通い、楽器職人達に相談し、それぞれ個性が異なる楽器の調整に没頭している様子を目にする時がある。ひたむきな若者達の姿に、昔の自分が重なるという。あるいは、ちょっとしたことで解決するのではないかと思うようなことで、ああでもない、こうでもない話し合っているのを耳にすることもある。しかし、解決策は自分で考えだし、失敗を繰り返しながら、納得できるところにたどり着くことが大事だということを経験的に知っている。だから何も言わずに見守っている。また、自分が通った道と同じ道を後輩達が今歩んでいる姿を見ると、自分も「うかうかしてはいられない」、「前を向いて進み続けなければならない」とも思う。

ソヘグムをきっかけに人とのつながりもどんどん広がっていった。音楽の奏法だけではなく、人との付き合い方、人生に大切なこと、暮らしの知恵など、教わるが多かった。相手の期待になるべく応えたいという気持ちもあった。そうやって頑張ると、応援してくれる人が増えていくことを若い頃に身をもって体験した。

明樹さん：高校二年生の時に、お正月の平壤のコンサートに出演するのに、楽器奏者として行ったんですが、司会の人が声変わりしちゃったということで、人がいない。私は楽しく楽器を弾いていたなら「ちょっとこっちに来て」と呼ばれて、「これ読んでみて」って台本を渡されたんです。それで「あなたは今日から2週間みっちりスピーチの先生つけるからやりなさい」と。ひたすらイントネーションとか、発声のトレーニングを受けたんです。しっかり口の形を作って、声の出し方を訓練する。「それなら（司会を）一生懸命やるから、この詩の発音も教えてください」

って条件つけたんです。

猿橋：詩？ですか。どういう、何か目的とかがあって？

明樹さん：いや、特に目的とかがあったわけではなくて、コンサートとは関係なく、ただ自分が好きだった詩です。先生は喜んで教えてくれました。……正月が明けて日本に帰ってきて、翌日学校でスピーチコンテストがあったので、先生に連絡して「出場させてください」と。「そんな、急に言われても」と一度断られたんですけど、「とりあえず行きますから聞だけ聞いてください」と。あ、今思うと、とんでもない学生ですね（笑）。行ったら、すぐに「どうぞ出てください」と言ってもらえました。むこう（朝鮮）でネイティブの話者に習ったとはいえ、二週間ですから、今思うとたいしてうまくなかったとは思うけど、そういう子どもながらの勢いを受けとめて、応援してくれる先生方、大人達に囲まれていたんだと思います。

日々、練習を重ねたソヘグムの演奏のために行った平壤で、急遽司会を任されても、動じず、不満を口にすることもなく、柔軟に引き受ける。そればかりか、それをチャンスとして生かす。大人達は、そういう意欲のある子どもの力になることを厭わない。そういう大人達との出会いを朝鮮でも日本でもしたのだと言う。

猿橋：そういう積極的なメンタリティはどこから来ていると思いますか。

明樹さん：やっぱり家庭ですね。好きなことをさせてくれた。自分のやりたいことをみつけてその道に突っ走る。それを「頑張って」と応援してくれる。だから、音楽が好きということもありましたが、もともと自分をアピールすることが好きだったのかもしれませんが。朝鮮の歌も歌いますが、日本の歌謡曲も歌います。大人達が好んで歌っていたのをね、「無

錫旅情」⁵⁾とか「雪国」⁶⁾とか、カラオケが流行っていた頃ですが。

そう思って来し方をふり返ってみると、実に多くの人達にお世話になった。今、息子も含め、子ども達や若い世代を見ていて、改めて気づかされることでもあるのだが、明樹さんにはおおよそ「人見知り」ということがなかった。ソヘグムに夢中になる前は、夏休みや冬休みは母（英愛さん）の新潟の実家に滞在していた。店が忙しいということと、自然を満喫させたいという親心から、新潟で過ごすことになったのだが、夏は磯遊びを、冬はスキーを楽しんだ。

夏は8月15日になると在日コリアンはパリロ（解放）を祝う。新潟の浜辺で同胞達が集まってバーベキューをする恒例の行事があった。肉も用意されているが、子ども達が釣りがけた魚も焼く。そのような機会に子ども達は歌うようにと促される。明樹さんは決まって大トリをつとめ朝鮮民謡を唄った。親戚達とカラオケに行けば、「無錫旅情」や「雪国」など、大人達が喜ぶ演歌を選曲した。両曲とも、自分が好きというよりは、大人達を喜ばせたい、場を盛り上げたいという気持ちが手伝って、そのような選曲になったそうだ。自分が好きだということも追求するが、人が好むことを汲み取って人を喜ばせる。その兼ね合いが絶妙なかもしれない。

4. 大学進学

高校卒業後、明樹さんは朝鮮大学校に進学する。金剛山歌劇団に入ることを、まっすぐに目標として据えていたため、他の道は考えることもしなかったそうだ。今になってふり返ると、音楽の理論や基礎を学んだことが宝になっているという。

明樹さん：大学は朝鮮大学校で師範教育学部、音楽科です。音楽教師養成のためのカリキュラムです。卒業生がみな音楽教師になるわけではないで

5) 1986年リリース（歌：尾形大作）。作詞・作曲は中山大三郎。

6) 1986年リリース、作詞・作曲・歌ともに吉幾三。

すが、金剛山歌劇団に入りたいと思っていたので、入る前に音楽を勉強しよう、という考えで行きました。授業の中でソヘグムを弾くということとはぼらないです。実技はピアノと歌で、あとは音楽の知識、理論と教育学。先生になるための国語（朝鮮語）とか。だからソヘグムは平壤に行ったときに先生について教えてもらう。あと先輩から習ったり。なにより自分で確立した部分が多いですね。それから朝鮮大学は全国から集まってくるので、友達づくりが大切です。その時に培った友人とのつながりが、今も生きています。

大学二年生の時、教育実習のために東北朝鮮初中高級学校の寮に滞在した。学校の先生は、明樹さんが金剛山歌劇団に入ることを志しており、教師になるつもりがないことをすでに知っていたため、「（先生になるための）勉強はしないでいいから、学生達と楽しく過ごしなさい」と言ってくれた。

何かの用事があったか、何がきっかけだったのかは忘れてしまったのだが、公衆電話から家に電話をかけた。受話器の向こうの母の声を聞いたとき、思いがけず涙が溢れた。これまで親戚の家や平壤に滞在し、家を留守にした経験はいくらでもあったはずなのに、今まで味わったことのない感傷だった。これがホームシックというものなのか。親元を離れ、その寂しさや心細さを胸の奥にしまい込んでいる子ども達に接して、そういう感情が沸き起こったのだろう。その瞬間はわからなかったが、後になってからそう思った。そして、今までそういう気持ちを一度も味わうことなく育ってきたことの理由を考えた。それはきっと自分を取り巻く人びとが、血縁のある、なしにかかわらず、家族同然にあたたく迎え入れてくれていたからではないか。当たり前だと思っていたことが、まったく当たり前などではないということに改めて気づかされた教育実習でもあった。

5. 金剛山歌劇団入団

大学卒業後、明樹さんはかねてから目指していたとおり、オーディションを

受けて金剛山歌劇団に入団した。明樹さんが在籍していた頃、金剛山歌劇団では、北は北海道から南は九州まで、巡業公演を行っていた⁷⁾。舞台を行うホールは、地方によって規模も設備も異なる。巡業の旅は、総勢 70 名ほどが、観光バス 2 台に分乗し、舞台を作る上で必要な一切切を 8 トントラック 1 台に搭載して回る。舞台がある日の朝に会場入りをして、設営し、その日のうちに最高の舞台を作り上げる。1 公演ずつ、1 から手作りで「地道な作業の繰り返し」だという。

フリーになって改めて気づいたことだが、広く音楽・芸能業界を見渡してみると、奏者や舞踊家の中には技芸だけに特化している人達も少なくない。専門性が細分化され、むしろその傾向は高まっているようである。金剛山歌劇団では奏者といえども舞台づくりに一丸となって取り組む伝統があった。もちろんそれぞれの部門に専門家がいるため、舞台設営の段階で、奏者はいわゆる「雑用」を担うことになる。明樹さんは、主に音響を担当することになった。

音作りのスペシャリストの側にいて、言いつけられたことをする。わからないことは聞く。ただし集中して作業をしているときには声をかけてはいけない。言いつけられたことを的確に行うためには、最初から最後まで技術者達の作業の流れ、重要なポイント、こだわりなどを把握しておくといい。明樹さんはもともと好奇心が旺盛なため、音響機器の設営や操作についても、興味津々で作業の一部始終を見ていたそうだ。そのようにして傍らにいと、専門技術について説明してくれたり、コツを伝授してくれたりするようになる。「この子は使える」、「手際がいい」と思ってもらえれば、信頼され、任せてもらえる領域が広がってくる。間違いを指摘し、ただしてくれる。最初はコードを這わせたり、巻き取ったり、「雑用中の雑用」だけだったのが、徐々に仕事の核心に近づいて、音作りの極意や、機器類の善し悪しについても教えてもらえるようになっていった。

7) 全国巡業に沖縄は含まれていない。2025 年金剛山歌劇団は 47 年ぶりに沖縄公演を開催した。

猿橋：音響を担当するというのは、自分で選んで？

明樹さん：いいえ、それはたまたまだったと思います。

猿橋：でもフリーで活動する上で音響のノウハウをもっているのは強いですね。フリーでやっていく上で、その次にこの技術、スキルがあるといい、役に立つというのは何ですか？

明樹さん：あー、照明？ライティングもわかっているといいですけど、それより全体のマネジメントかな。

たまたま音響を担当することになったが、営業や広報、企画などにも取り組んだ。やったことがないことに新たに挑戦することが好きだし、ほかの人が嫌がるようなことも、むしろやってみたいと思って取り組む性格なのだという。ビラ配りも嫌ではないし、営業も抵抗なく取り組めた。小学校での演奏会など、仕事の大きい小さいに関係なく、仕事をとってくると予想以上に褒められ、感心された。仕事を依頼する側にも受ける側にも喜んでもらえて、素直に嬉しいと思えることが多かった。そうやっていろいろなジャンル、専門分野の人達とのつながりができ、そこで得られた知識、経験、人脈は、フリーとなった今、大きな糧となっているという。

音楽の面でも、活動の幅が広がった。それまでは金剛山歌劇団に入団すると、平壤で三ヶ月間の指導を受けることになっていたが、明樹さんが入団した年は諸事情でキャンセルとなってしまった。平壤での稽古を楽しみに入団した明樹さんは、出鼻を挫かれるような心持ちがした。意気消沈している明樹さんを先輩達がなにかと気にかけてくれた。当時の金剛山歌劇団は、大人数で編成するコンサートホールでの興業を行っていたが、少人数の編成で演奏する試みがはじまっていた。

明樹さん：まだそんなに実力もないから、平壤で稽古して、うまくなるぞって意気込んでいたのが、行かれなくなってしまって、たぶん、しょんぼりしていたんですね、それを先輩達が「出てみない？」って誘ってくれ

た。劇団の20代の若手達が、大きな公演ではなくて、自分たちのライブをやりたいってということで、企画していたんです。しっかり作り上げた舞台はっかりやってきた金剛山歌劇団としてはセンセーショナルなことでした。チャンセナプとカヤグムとチャンゴで「溪谷」という曲を演奏するから、その伴奏に「一緒に入ってみる？」って入れてくれたんです。そのうち、「せっかくだから自己紹介もかねてソロでもやれよ」ってなって。その時にひとりで演奏したのが「アリラン」。めちゃくちゃ緊張しました。

猿橋：それまでも大きな舞台で演奏は何度もしているんですよね。やっぱり違いますか。

明樹さん：いやあ、全然違います。学生という立場でみんなと一緒に合奏するのと、「劇団に新人が入りました」と紹介されて、プロとしてひとりで演奏するのは、まったく違いました。たしか阿佐ヶ谷にあった、今もあるのかな、小さなライブハウスで、そこに百人ぐらいのお客さんがびっしり入っている。客席も椅子じゃなくて地べたに座っている。

猿橋：お客さんとの距離感が違いますね。

明樹さん：ソロ演奏の出番が来て位置についてふと見たら、僕の足元、三十センチぐらい先に明実（妹）が座っているのがぱっと目に入って。わーわーと思って、構えたら手が震えてる。震えが止まらない。弦楽器って緊張して弾くと弓が飛んじゃうんですよ。ととととって音が飛んじゃう。演奏終わってから妹に「震えてたよー、よかったよー、フル（震）アリ」とかってからかわれました（笑）。それが僕のデビュー戦。20歳だったから1997年のことですね。

その時のライブは二日間で200人あまりを動員したのだという。明樹さんのすこし先輩にあたる当時の若手団員たちは、ひとりひとりが民族楽器で何をしたいのか、何ができるのかを模索し、まだ誰も体験したことがない音楽の形を試みていた。活動の中では、互いに少しずつ異なる考え方や立場性があるこ

とも見出される。しかし、そのような多様性と、まさに変化する途上にあることが観客の共感を呼んだ。この、金剛山歌劇団の若き奏者たちによる自主企画ライブには、2000年代初期にかけて、年を追うごとにファンや支持層が増えていった⁸⁾。

ソヘグム奏者として金剛山歌劇団に入った明樹さんだったが、打楽器のグループに加えてもらったのも、この時期のことだった。

明樹さん：歌劇団の公演は、一番最後にキルノリ（農楽パレード）で会場を盛り上げるんです。伝統衣装を着てチャンゴをしょった人達が劇場の後ろの扉から演奏しながら出てきて、通路を歩いてお客さん達を盛り上げる。オーケストラで演奏していると、そちらに出演する先輩達が、ひとり、またひとりと消えていく。着替えがありますから、その準備のために抜けていくわけです。それで、出番になって一斉にわっと出てくるのですが、その瞬間がすごく好きで、わー、いいなあ、かっこいいなあって、憧れていたんです。

1980年代に入ると、金徳洙をリーダーに韓国で考案された「サムルノリ」が世界的な評価を受けた。朝鮮半島で古来から伝承される各地のリズム（長短、チャンダン）を融合させた音楽「サムルノリ」は、音楽形式を指す語でもあり、グループ名でもある。後にはひとつの韓国伝統音楽のジャンルとして確立されていった。サムル⁹⁾の名手である四人の「サムルノリ」メンバー（金徳洙、李光壽、崔鐘實、姜旻奭¹⁰⁾）は、1980年代から90年代にかけて、日本各地で精力的にワークショップを展開した。当時の金剛山歌劇団の若手メンバー達は、そうした機会に奏法を身につけ、彼らの演舞は金剛山歌劇団の人気演目の

8) 韓東賢（2001, July 20）「やりたい事、やれる事を：3回目の自主企画ライブ「ヒャンⅢ」・金剛山歌劇団の若手奏者たち」朝鮮新報

9) 四物。ケンガリ、チャング、チン、プクの4つの楽器を指す。

10) 創設時のメンバー、金容培に変わってメンバーとなる。（四物遊撃（1988）『サムルノリ宣言——東洋の鼓動が世界を驚愕させた』リットーミュージック）

ひとつとなった。

憧れのまなざしを感じ取ったのか、先輩達は明樹さんに「やってみるか？」と声をかけてくれた。迷わず「やります！」と答え、特訓の毎日が始まった。

明樹さん：チャンゴ（太鼓）は小学生の頃もやりたと思っていたので、身近でしたが、踊りはやったことがないのに、それを1から習う。サンモ（リボン付の帽子）を回せるようになる練習から始めました。ソヘグムで劇団に入って、まだ下手だから練習しないといけないのに、そちらの練習に明け暮れました。たぶんソヘグムの先輩達は「明樹、何やっているの？そんなことしている暇はないでしょう」と思っていたと思います。

猿橋：迷走してると？直接言われたこともありましたが？

明樹さん：「どうしちゃったの？」と思われていただろうと思うんですが、直接とがめられるようなことはなかったですね。今思うと、ソヘグムの奏者は女性ばかりで、男性はその時、私ひとりだったんです。だからできたことだったと思っています。もし私が女性だったら、許されないことだったんじゃないかと思います。

猿橋：結果的にそれはよかったですか？つまり、ソヘグムを演奏する上で、活かされている？

明樹さん：韓国朝鮮のリズムを身体で覚えたという点で、すごくよかったと思います。

明樹さんは、先輩達（第二世代）から奏法を伝授された、韓国「サムルノリ」の第三世代ともいえるだろう。後に、金徳洙氏が日本でサムルノリ公演を行った際、一緒に舞台に立たせてもらったこともある。その時、明樹さんがソヘグムの奏者であることを知った金徳洙氏は、「あなたの専門の楽器も披露するといい」と言って急遽、ソロの出番を作ってくれた。ただし、座って演奏する楽器であることは想定されていなかった。

猿橋：どうしました？

明樹さん：立ったまま演奏しました。無理矢理。

猿橋：えー、それは伝えられないものですか。

明樹さん：言えない、言えなかったですね。「椅子用意してください」とは。

笑

コンサート終了後、千里で打ち上げを行った。千里で撮影した金徳洙氏との写真を、明樹さんは「我が家の家宝」と言って嬉しそうに見せてくれた。

6. 慧瓊さんのソヘグムとの出会い

金剛山歌劇団で活動を共にしていた尹慧瓊さんと結婚を前提としたお付き合いがはじまる。とはいえソヘグムを通して、ふたりはすでに長年の知己の間柄だった。

慧瓊さんは長女で、二人の弟がいる。両親は、共に茨城朝鮮初中高級学校で教員をしていた。父親の仕事の関係で小学校三年生の時に仙台に引っ越す。東北朝鮮初中高級学校に高校まで通い、朝鮮大学校の音楽科に進んだ。仙台に引っ越してしばらく後、父親は飲食店を始め、慧瓊さんが実家を離れてからではあるが、焼肉店を開業した。ずっと夫婦で切り盛りしてきたが、今では、二店舗に増やし二人の息子たちが一店舗ずつ経営している。

両親は音楽が好きで、慧瓊さんが物心ついたときから、家の中ではいつも音楽が流れていた。西洋のクラシック音楽と朝鮮の音楽に子どもの頃から親しんだ。

慧瓊さん：父が万寿台（マンスデ）芸術団や平壤学生芸術団のレコードをたくさんもっていました。その録音をステレオで聞いて、向こう側にこれを演奏している人達がいるのかなと想像しながら、スピーカーに耳をつけて熱心に繰り返し聞いていました。親よりも私の方が好きだったかも

しれないです。上の弟は小さい頃からピアノをやっていて、コンクールで優勝することもあったぐらい打ち込んでいました。今は鑑賞するだけです、相変わらず音楽が好きです。下の弟もホルン、吹奏楽をやっていました。今も焼肉屋をやりながら友達とバンドを組んで趣味でやっています。

焼肉店を経営していること、音楽が好きなことなど、河家と共通点が多い。

慧瓊さん：アボジの故郷は全羅道、オモニは慶尚道。その組み合わせもここ（河家）と一緒になんです。

慧瓊さんがソヘグムを手にしたのは四年生から始まるクラブ活動だった。慧瓊さんは、特にソヘグムに思い入れがあったわけではなく、転校したばかりの学校で仲良くしてくれた先輩がやっていたので、「なんとなく始めた」のだった。訪朝によって音楽の世界が広がり、丁寧に指導してくれる先生達、共に音楽を奏でる仲間たちと過ごす時間が増えるに従い、すっぴんのめりこむようになっていった。

慧瓊さん：私が小学生の頃（1980年代）、朝鮮はあこがれの国でした。芸術団の演奏などで触れて、行ってみたい。旅行で行くことはできる時代でしたけど、私たちは経済的に行ける身分ではなかったんですね。何か行ける手段はないものかと思っていたときに、通信教育という夏休みに1ヶ月行かれる制度があることを中学一年生の時に知ったんです。たまたま私たちの学校に来ていた教育実習の先生が、ソヘグムで通信教育に行ったことがあって。クラブ活動の民族楽器の先生も、引率で行っている。もう「その道しかない！」と思って一生懸命練習しました。次の年にオーディションに受かって中学二年から高校三年まで5年間、毎年行きました。その制度に参加して、向こうで練習することによってどん

どんのめりこんでいく感じ。楽器の素晴らしさもそうですし、出会う先生達にも惹かれていく。もともと音楽が好きだったので みんなと一緒に奏でられる喜びとで、どんどん好きになっていく。あつという間にとりこになって、中学三年の時には、プロを目指す、金剛山歌劇団にこの楽器で入るって目標を定めていました。

平壤で実施される夏期の短期研修をさす「通信教育」には、日本全国の朝鮮学校から同世代の在日コリアン達が集まる。毎年、夏に選抜をくぐり抜けて再会する学生たちと、いつしか同じ目標をもち、互いに切磋琢磨するようになっていく。「みんなで頑張ろう」という結束と友情が育まれていった。

平壤では一流の指導者につき、明けても暮れても朝鮮の音楽、ソヘグムに浸っていることができるが、仙台に帰ると専門家はほとんどいない。金剛山歌劇団や朝鮮大学校がある東京であればまだしも、東北地方に暮らしている以上、朝鮮で学んだことを独学で磨いていくほかはなかった。しかし、慧瓊さんは、そのような環境に置かれていたからこそ、他の音楽ジャンルに広く触れ、応援してくれる大人たちの熱意に多くを学んだのだと語る。

慧瓊さん：クラブ指導の先生が、もともとクラリネットの奏者でしたが、民族楽器のこともたくさん勉強してくださって、音楽性についてはその先生から多くを学びました。

慧瓊さんの才能と、努力を惜しまない勤勉さと、とどまるところのない熱意に触れた大人たちが道を切り拓くのに尽力してくれた。

慧瓊さんと明樹さんは、同じ指導者に師事している。現在の師匠、申律（シニリュル）先生は、平壤に暮らすソヘグムの第一人者である。朝鮮半島北部、咸鏡北道（ハムギョンブクト）清津（チョンジン）市の出身で、父親はバイオリニストだった。申律先生も最初はバイオリンを専攻していたが、ソヘグムの開発と普及の国家プロジェクトが始まったことを受け、ソヘグムに転向した。

ソヘグムの演奏で頭角を現し、平壤音楽舞踊大学（現、金玉均名称音楽綜合大学）からスカウトされ入学することになる。

慧瓊さん：今習っている先生は、小さい頃からカセットで聞いて憧れていた申律先生です。一番好きな演奏者から学べる機会を作ってくださった。私は朝鮮大学を卒業して、金剛山歌劇団に所属していましたが、その当時は在日と平壤の音楽家達の直接の交流はなかなか難しい時期でした。コンクールに出る準備のために平壤の音大に滞在していた時（2000年）に、3カ月前に突然課題曲が変わったんです。そういうことは通常ではありえないのですが、その課題曲が申律先生が作曲した「ひばり」という曲でした。音大の先生が、直接指導を受けられるように「一筆書いてあげる」と推薦状を書いてくださった。そこで全部が動き出したんです。それが始まりです。

慧瓊さんが言う「始まり」とは、今ここにいる「ソヘグム奏者・尹慧瓊」の始まりということであろう。人生には転機というものがある。運や縁も大切だが、それを結びつけるのは、日ごろのたゆまぬ努力と情熱あつてのことだ。

明樹さん：慧瓊は「その人に習いたい」ってずっと思っていて、どうにかその先生と出会って、その方も奏者で、第一線で演奏活動をしていましたから、当時は人に教えるという考えはおもちではなかったんです。でも、日本から来て、誰よりも練習を重ねる。そういう慧瓊の姿を申先生が見て、「これはちょっと違う、弟子入りさせてあげる」となりました。私が弟子入りできたのは、まだその頃は結婚していなかったのですが、結婚すると決まっていたので、「尹さんと結婚するなら、隠し事は駄目だろうからあなたにも技を伝授しましょう」って言うてくださって。だから、私は慧瓊にあやかって指導していただいている。私は「あやかりの人生」なんです（笑）。

明樹さんの言葉には、慧瓊さんへの尊敬の気持ちが込められている。明樹さんは自分自身については「あやかりの人生」とやや自嘲気味に笑って言うが、慧瓊さんが音楽を追究できる環境を整えるための尽力を惜しまない。そうしながら、自分なりに出来る、自分にしか出来ない音楽家、ソヘグム奏者、公演企画、料理人、朝鮮文化の伝達者としてのありようを探索している。いろいろなことに取組みながら、中核にソヘグムの日本での継承と発展を置く。それを明樹さんは「使命」だと表現する。

猿橋：「使命」というととても重い言葉だと感じますが、もう少し詳しく教えてください。

明樹さん：先生は、若い頃から、演奏でアルゼンチンやブラジルをはじめ世界中をまわってきた方なんです。日本から訪ねてきた私たちと出会って、レッスンを重ねるうちに、「この素晴らしい音楽を、私たちがもっているものは全て教えてあげるから、あなたたちが受け継いで、日本にもち帰って広めていってほしい」という言葉をいただきました。あまりにも大きい言葉ですが、私たちはそういう立場にいる。私たちだからこそできることがあるのではないかと、という思いから「使命」という言葉を使いました。

申先生のレッスンから、慧瓊さんは演奏の技術面を学ぶだけでなく、指導者として、ひいては全人的な成長につながるたくさんのことを学んでいる。

慧瓊さん：学生時代はひとりで練習して、仲間と一緒に奏でることが楽しいというだけでした。「人に教える」という発想がない。「人に教えるのは苦手、教えられない」と言って逃げていました。東京の子達は、後輩を教えてつないでいくという伝統があるけど、東北にはそういう縦のつながりはなかったというのもありました。音大の先生も、見て真似て学び

なさい、という指導法でした。演奏は素晴らしい。でも、どうしたらそういう風になるのか解決できないまま、ひとりで試行錯誤をしていました。ところが申先生は細かく、この音色はこの奏法。この音の出し方はこう、と。医学も勉強なさってフォームから始まって、身体づくりがこうだからこうするとこうなるという指導で、今までの悩みが解決されていく。感性も豊かで、知識も豊富なので、喩え話もためになる。楽しく導いてくださる。方向性を導いてくれるので未来が明るくなる感じがしました。迷いのない出会いでした。

これまで、奏者は奏者として演奏に集中するべきで、指導は別だと思っていた。よい指導者というものは、よい奏者とは別で、相性のようなものも重要だと思っていた。ところが、先生と出会い、技術の高い演奏は、その根拠をしっかりとつかんでいることと結びついており、論理や言葉で説明できることであると学んだ。それから教えることが楽しくなった。すでに技術が一定水準の人だけではなく、初心者なら初心者なりの、子どもなら子どもなりの上達の道筋がある。そういう道筋に付き添っていくことが、楽しく、やりがいのあることだと感じられるようになった。悩んだ時期が長かったから余計にそう思うのかもしれないが、申先生との出会いは慧瓊さんにとっても明樹さんにとっても「ソヘグム奏者としての人生が変わった」出会いだった。

7. 平壤での生活

慧瓊さんは金剛山歌劇団に在籍していた頃、コンクール出場者として選拔され、平壤で1年間のソヘグム留学の機会を得た。朝鮮の食糧事情が深刻な状況に陥っていた1990年代半ばから、さほど時間を経えていない2000年のことである。音楽が中心だが、平壤の生活の中で学ぶことも多かったという。

慧瓊さん：冬の寒さはとても厳しい。稽古はつく先生によって場所が決められるので、音楽大学に行く人もいます。私は先生の関係で文化センター

のようなところに毎日通うことになりました。真冬は昼間でもマイナス 20 度の極寒の世界です。身体を動かしていないと一気に冷えるから、一時も止まることなくソヘグムを弾き続けていました。先生の奥さまが寒いでしょうからって毛糸で座布団を編んでくださったり、綿の入ったアノラックのような防寒具を作ってくださいって、足元からすっぽり覆われるような。その暖かさに心まで温まりました。

せっかくの機会だからと寸暇を惜しんで練習に明け暮れた。音楽留学で行く人は、庶民の暮らしに触れる機会が少ない。レッスン場への送迎のほか、生活に必要なことは「指導員」と呼ばれる人が取り計らってくれる。その人達とも、月日が経つにつれて、人間的な交流が生まれていったという。

慧瓊さん：私達、日本から行った在日はホテルの外に出るときはいつも指導員の方と一緒にです。移動はいつも車でした。私の指導員の方は結婚していて、お子さんもいる女性の方で、毎日ホテルの食事ばかりだと飽きるだろうからと自家製のお味噌やキムチを差し入れてくださったり、母親のように接してくれました。私が練習する場所は、大学ほど遠くなくて、歩いて 10 分か 15 分程度のところだったんです。最初は、大学に行く人達と同じように車で行っていたのですが、そのうち歩いて通うようになりました。そうやって毎日同じ時間に、たった 15 分程度の道のりですけれど、外を歩いて行くと、毎日同じ人とすれ違う。向こうも決まった時間に行動しているわけですね。だんだん、あ、今日もこの人だ、と見覚えのある人になっていくと、言葉は交わしませんが、ちょっと会釈を交わすようになり、だんだん親しみを覚えるようになっていきました。

人と人との素朴な交流を重ね、朝鮮の日常生活も「きらきとした思い出」になっていると言う。

8. 明樹さんと慧瓊さんの結婚

金剛山歌劇団でともに寮生活をしていた当時の仲間達は、今も何かあれば集まる気心知れた仲である。厳しい稽古や、若者にとっては窮屈だと感じられる規則、経済面の困窮などもあったが、仲間達と最高の「舞台をつくりあげる」という一致した目標のためにしのぎを削る日々は充実していた。同期や同室だった友人達との思い出話は尽きない。「家族以上の関係だよね」、「この友情が人生最大の財産」と締めくくる。団員時代の仲間の大切さは、年月を経れば経るほど、より強く感じるようになっていく。

明樹さんと慧瓊さんは、劇団でともに活動していたため、お付き合いは長くなっていたが、なかなか結婚するきっかけがないまま、演奏活動に打ち込む毎日を送っていた。その当時は、劇団内にカップルが多く「都営住宅に当たったら結婚する」という「先輩から続く伝統」があったそうだ。なんとなく二人も応募したら当たってしまった。ただ素直に「都営住宅が当たったので結婚します」と両親（孝成さん・英愛さん）に伝えようと、「順番が違う」と怒られた。

明樹さんは改めて襟をただし、慧瓊さんのご実家に挨拶に行くと、お父さんは「慧瓊が選んだ人だから」と祝福してくれた。たまたま桐生に暮らす祖父が来ており、挨拶をすることができた。「慧瓊」という名前は、古典文学に親しむ祖父がつけてくれた。「慧」は知恵の「恵」の旧字で知識などを意味する。「瓊」は「玉のように美しい」という意味で、現代では「慶」と表記する。祖父が好きな文学作品に出てくる女性「慧瓊」にちなんだと聞いている。

二人が結婚の準備を始めた頃、明樹さんの祖父（應烈さん）は体調を崩していた。数年前から心臓が弱り、少し体を動かすと息が上がってしまうため、店に立つことも少なくなっていた。それまで、順子さんが脳梗塞を繰り返していたので、体調管理は祖母の方に気持ちがいていた。祖父は誰よりも元気で、いつも前向き。それがいつまでも続くものだと思っていた。心臓の精密検査をしたときに、かつて罹患した前立腺がんが骨にまで転移していることがわかった。診察を終えた医師は「相当痛かったはずですよ。ずっと我慢していたのでしょう」と言った。心臓はかなり弱ってしまっていて、

体力的に手術ができない状態だった。

2002年7月3日に婚約式を行い、その1年後、2003年6月8日に式の日取りを決めた。

2002年の暮れ、12月27日のことだった。店は忘年会の客で満員、家族総出で年末の商売繁盛を乗り切らんとしているとき、2階から「ヒョソーーーン、ヒョソーーーン」と息子と呼ぶ應烈さんの声が聞こえた。孝成さんが2階に上がると、應烈さんの様子が明らかにおかしい。苦しそうである。「病院に連れて行ってくれ」と言う。救急車を呼ぶべきか、一瞬判断に迷ったが、車で連れて行った方が早いと、心臓を診てもらっていた自衛隊中央病院¹¹⁾に明樹さんが連れて行くことになった。緊張し、焦る気持ちをかろうじて抑えながらハンドルを握る。後部座席で祖父の体調はどんどん悪化していくようだ。バックミラー越しに「ハラボジ、大丈夫？」と声をかけると、力なく「苦しい」と返ってきた。その声を思い出すにつけ、明樹さんは常に気丈で、頼もしい面しか見せずに家長として日々を過ごした祖父の生きざまに思いを馳せるのだという。

一度も赤信号に阻まれることがなかったことに、見えない力が守ってくれているに違いないと自分に言い聞かせて道を急いだ。病院に到着するや、應烈さんは明樹さんに「車椅子をもってこい」と短く命じた。すぐさま玄関前に置かれている車椅子を引き寄せる。車椅子で院内に入り、ベッドに移した時には、應烈さんは泡を吹いて意識を失っていた。処置室に運び込まれ、最初はふたりだった医療従事者が、ひとり、またひとりと増えていく。彼らが交わしている言葉の意味が取れなくても、明樹さんには祖父の容態が重篤であることが、医療者達の動きや声から感じ取れた。部屋の外に出るようにと言われ、いたたまれない思いで廊下にたたずんでいた。

應烈さんは、延命措置によって一命は取りとめたものの、昏睡状態が続いた。順子さんは病室を見舞っては「おじいちゃん、おじいちゃん」と声をかけ続けた。容態が変わると家に電話がかかってくる。深夜であろうと、早朝であろう

11) 世田谷区池尻にある500床の総合病院。1956年開設。

と病院に駆けつける。2003年1月30日、その時、順子さんは自身の通院のために駒沢病院に行っていた。危篤との連絡を受けた順子さんが、病院の外の電信柱に手をつけて、かろうじて体を支えながら泣いていた姿を、英愛さんは今も忘れずにいる。

英愛さん：おじいちゃんの亡骸を引き取るときに、お医者さんも看護婦さんも、敬礼をするんですね、自衛隊病院だから。お世話してくれた人達が直立の姿勢で敬礼しているところを通して行ったときに、これって一体どういうことだろうって思いました。おじいちゃんがそういう風に最期を看取られ、見送られる。これはどういうことなのかなって。

すごい人だった。12月27日の夜、自らの身体の異変を感じた應烈さんは、苦しみの中、身支度をして、ジャケットまで身につけた。歩くことはままならず、孝成さんに「肩を貸してくれ」と言った。これが、孝成さんが聞いた父の最期の言葉となった。「車椅子をもってこい」。これが、明樹さんが聞いた祖父の最期の言葉となった。それほど苦しかったのに、應烈さんは、順子さんのために布団を敷いて妻の寝床を整えていた。

明樹さん：これが、おじいちゃんの最期です。最期まで人のために、おばあちゃんのために。自分の身支度をして、布団を敷いて、おばあちゃんの寝床を整えて。よく、「よい死に方をしたい」って人が言うのを聞くじゃないですか。でも、よい生き方をしないとよい死に方はできない。そう思います。祖父は、私の中で一番影響を受けた人です。私は祖父のような、こういう人間になりたい。

祖父が亡くなったので、喪に服さなくてはならない。結婚式を延期すべきかと家族で話し合った。祖父が亡くなったのは1月30日である。朝鮮半島の旧暦でみれば年が明ける前だった。明樹さんと慧瓊さんの結婚式を楽しみにして

いた。だから、結婚式は予定通り 2003 年 6 月 8 日に挙げることにした。

ビールが好きな應烈さんだった。遺影にビールを片手にした写真を選んだ。明樹さんと慧瓊さんの婚約式の日に撮影した写真だった。穏やかな笑みを浮かべている。思い返せば 2002 年、明樹さんはある日突然祖父に呼び出され、焼肉をタレの作り方を教わったのだった。あのとき、祖父は死期が遠くないことを予感していたのかもしれない。そこまで思いを巡らせることができなかった。明樹さんの記憶の中の祖父は、いつも元気で、つらそうな表情を見たことがなかった。

9. ソヘグム奏者として、新たな一歩

夫婦となった明樹さんと慧瓊さんは、新居で新しい生活をスタートさせた。2006 年 4 月に明樹さんは 10 年間、慧瓊さんは 12 年間つとめた金剛山歌劇団を退団することになった。劇団を辞めた後の音楽活動をどう進めていくかで、しばらく逡巡する日々が続いた。

初めて自分で曲を作ってみた。それまでソヘグムのよさを表現できる曲を探して、さまざまなジャンルと弦楽器の曲を幅広く聴いてきた。ソヘグムの伸びやかさを存分に表現できる旋律の特徴が断片的に頭の中にある。それらをひとつの曲にまとめあげることはできないだろうか。曲づくりに没頭し、「できた！」と顔を上げた時、部屋の中にぽつんと佇んでいる自分自身の小さな存在に気づいた。そこで、曲のタイトルとして「외돌토리 (ウェドルトリ、ひとりぼっち)」とつけてみた。

帰宅した慧瓊さんに、さっそく「曲が書けたよ。「ひとりぼっち」っていうんだ」と伝えると、「(心が) 病んでるねえ」と微笑みながら言う。曲を聴いた慧瓊さんは「밤길 (パンキル、夜道)」と朝鮮語で響きのいいタイトルを提案してくれた。親交を深めていたシンガーソングライターのルンヒャンさんが編曲者として彩りを添えてくれた。この曲を収録した初めてのふたりの CD、『HIBARI』を 2006 年 12 月にリリースした。ふたりでコツコツと貯めた貯金箱を割って「これしかないのだけれど」と正直に言ってレコーディングスタジ

オを借りた。申律先生が作曲し、慧瓊さんがコンクールで演奏した「ひばり」も収録されている。

明樹さん：2006年の4月に退団して、夏にパンキルが出来上がった。その時ですね、CDを作りたいって思って、知り合いのレコーディングの人に相談したんです。ちゃんとしたレコーディングスタジオを借りるにも資金が足りない。巣鴨に在日のコミュニティセンターがあって、地下に多目的室があったんです。そこを2日か3日借りてレコーディングしました。上の階の人達が立ち働く足音が聞こえちゃう。「すみません、足音が、レコーディングするんで、今からちょっとだけ静かにしてください」ってお願いして。レコーディングの第一人者の、葛巻善郎さんが機材を運び入れてくれて、ルンヒャンがアレンジしてくれて。一曲目が「トラジ」なのですが、それを聞いて「インストつけようよ」って、キーボードで音をつくってくれた。サンプル音源がはじめて出来上がって、車のカーステレオで慧瓊と二人で聞いたとき、「ああ、救われた」って思ったんです。二人で、新しい一步を踏み出せた。

お披露目の「レコ発ライブ」はなぜか焼き鳥居酒屋だった。ライブをしては手から手へ、一枚一枚CDを売っていった。6千枚ほど作ったCDはほぼ完売となった。「まだ音楽をCDで聞く文化が残っていた時代」だった。大きな組織、華やかな舞台から離れ、二人だけで二人だけの一步を踏み出しそうとしたとき、多くの人達が快く手を差し伸べてくれ、ひとつの作品を世に送り出すことができた。このことは、その後の河明樹、尹慧瓊の音楽人生の基点となっている。

どこに向かうのか、前人未踏の道を行くのは、難しく、思い悩む時もある。されど心躍る歩みでもあると明樹さんは言う。



河明樹・尹慧瓊『HIBARI』ディスクジャケット

(つづく)

